

Sign Languages as Languages

手話は言語だ！

—さまざまな手話言語における言語学的特徴—

スーザン D フィッシャー



きょうは手話言語について、「手話は言語である」というタイトルで話をしたいと思います。

きょうのお話の内容ですけれども、まず一番最初に、紹介から始まりまして、その次に、手話に対します神話、誤解といいますか、そういったお話をしたいと思います。

それから、手話と言語理論からお互いにどういった貢献ができるのかというお話と、その後、どうして言語学者が手話を比較研究する必要があるのかという理由について。そして、アジアと西洋の手話の特徴について、一番最後に、結びとしたいと思います。

こちらのほうは、アジアの手話語属の一部をあらわしています。

こちらのほうは、インド、パキスタン手話ということで、南アジアのほうで使われています手話です。

そして、その次に書いてありますが、日本手話語属、この中には、日本手話、韓国手話、台湾手話が入ります。これは歴史的な理由がありまして、同じ語属に入っているわけです。

中国手話は、香港手話、中国手話からその語属に入るわけですけれども、タイ手話、そして、シンガポール手話も中国手話の語属に入るといっても言われております。

きょうは、インド、パキスタン手話ではなくて、東アジアの手話についてお話をいたします。

まず、当然のことだと思いますけれども、一度ここで繰り返し確認しておきたいことといたしまして、まず、聾の方は聞くことができないと。

その教育の中でこのことがよく忘れがちなので、ここでもう一度強調しておきたいと思います。

ですけれども、ほとんどの聾者の方は、脳には全く問題がないということです。

したがって、耳が聞こえませんが、聴覚を使って語学を学ぶことはできませんけれども、視覚を使って言語を学べるわけです。

手話というのは、進化していく中で、その視覚というチャンネルを使って、それを利用して進化してきたわけです。

その視覚のチャンネルで伝えることによつての

Some Asian sign languages families
Indo-Pakistani Sign Language
Japanese family – includes Korean Sign Language, Taiwan Sign Language
Chinese Sign Language, also Hong Kong, Thai (?), Singapore

何ができるかといいますと、まず、パターン認識によりすぐれている言語であるということになり

ますし、そして、音声言語と比較した場合に同時性があるということです。

音声言語の場合は、単語を順番に話していく必要がありますけれども、視覚を使いますと、同時性を持てるということです。

皆さんの中で聾の方とこれまで会ったことがある人いらっしゃいますでしょうか。

手話を勉強したことがある方、少しでも結構ですけれども。

(数人が挙手)

オーケー、よかった。

次に、人が手話についてこうだと思っている、ですけれども、それは間違いであるということについて、どういった誤解があるのかお話をしたいと思います。

人によっては、この後お話する内容に関して、ここに書いている全てのことが真実であるというふうに信じてらっしゃるんですけれども、お互いが実際矛盾しているという内容になります。

最初の神話といたしまして、手話には文法はないということです。

そして、それに関連いたしまして、手話言語というのは未発達であって、具象的であって、そして、概念的な、抽象的なものは表現できないという考えです。

それから、もう一つは、手話というのは、どこに行っても同じだという考え。または、その手話というのは、普遍的であるというふうな考え。

もう一つ最後に書いていますのは、手話というのは音声言語をある意味、簡単にしたといえますか、質を落としたようなものだという考えです。

では、どうしてこういった考えがあるのか。

まず、耳が聞こえる方、聴者の方というのは、実際にその手話を本当に見ているわけではありません。

この一つの理由としましては、聾の方、聾者というのは、自分たちの言語を守ろうとする。すなわち自分たちの団結をあらわすために、自分たち

が一つのグループであるということを確認するために自分たちの言語を守ろうとしているという側面があります。

聾の方が聴者の方と話をするときというのは、コードスイッチングということが起こっています。行動を切りかえているということなので、聾者同士で使っているときの手話ではない。より音声言語に近い手話を使っているということなので、聴者の方もなかなか本当の手話というのは見えないということなんです。

それから、手話には文法はないだとか、そのようなことをもとに信じている人たちがよくどうしてそういったふうに思うのかということですが、これも、これは手話というのを正確に完全に書き記すことが難しいと。そのようなツールが少なくともこれまではなかったということが原因です。

それから、もう一つですけれども、なかなか聾者の人に対して、教育が十分提供されていないがために、聾者の方は、話し言葉だとか、書き言葉をしっかりと習得できないということなので、聾者の方が書く、その書き言葉というのはブロークンであるという場合が多いということなんです。

それから、続きになりますけれども、手話というのは、言語的な表現の一つのチャンネルであるということです。したがって、例えば、アメリカ手話だとか、日本手話というものもありますし、または英語を手話で表現する、日本語を手話で表現するということもできるということです。

今やりましたけれども、今、英語で話をしながら、実際にその話している内容を手話でやってみました。この手話というのが、実際は、アメリカ手話ではないわけです。あくまでも英語の手話化したもの、日本語では対応手話と言いますけれども、音声言語にあわせた手話だということです。

今のように、通常、者の方、耳が聞こえる人が見る手話というのは、手話化した日本語だとか、手話化した英語だとかということになりますので、したがって、その聴者の人から見れば、手話

というのはただ日本音声を手話にただけなのだ
と考えるわけです。

中国なんかは、それを公式な方針としておりま
して、中国語を手話化したものを公式なものとし
ています。実際は、本当の中国手話では実ないわ
けですけども、そのような国としての方針もある
わけです。

私は、3つの言葉を自分で編み出したわけでは
なくても、その概念ということで3つの概念を持
っています。1つは、自然手話言語、もう1つは、
自然手話体系、そして、最後に人工手話体系とい
うものです。

まず一番最初に、自然手話言語ですけども、
これは、聾者の家族、すなわち親が聾者である子
供、子供は必ずしも聾者でない場合もありますけ
れども、親が聾者であるような家族が何世代にも
わたって受け継いできた自然な手話というもので
す。

自然手話体系については、後ほど説明しますけ
れども、最後の人工手話体系というのは、もとも
と自然手話だったものに関して、自然手話の一部
をとってきて、それをなるべく音声言語に近い手
話にした人工的な手話だということです。

(手話の動作)

「あなたは、チョコレートが好きですか。」
今のが日本語に対応した日本語対应手話というも
のでして、「は」だとか「が」だとか、それぞれそ
の手話に対応してあるわけです。

先ほど申しました自然手話体系というのは、聾
者の方と聴者の方がコミュニケーションをとる中
で生まれてきたものでして、自然言語、自然手話
言語からその手話をとってきて、そして、それが
文法的なメカニズムの中で自然発生的に体系化し
たものということになります。

次に、自然手話言語を使って、日本手話におい
て少し示してみたいと思います。

(手話の動作)

「あなたは、チョコレートが好きですか。」

では、この神話ということで、手話言語には文
法はないということなんですけれども、実際には
文法がありますので、それを見たいと思いま
す。

最初に御説明したい概念といたしましては、
Classifier Predicateというもので、類別述語と
いうようなものになります。

そのClassifier Predicateを類別詞、またはC
Lと呼んでおりますけれども、それをその言葉を
知らなくても、皆さん、今説明したように、「2冊
の傘」と言えば、それがおかしいということはわ
かるとは思いますけれども、日本語の場合、そのよ
うにその数を使った場合の類別詞というものがあ
るわけです。

手話の場合は、その類別詞というものなんです
けれども、それが動詞の述部のところにあらわれ
てくるということです。それは、何かそのものが
動いているとした場合に、動いているものによって手
話が変わってくるという内容になります。

それは、音声言語、アメリカ・インド言語でも
発生するわけです。

例えば、車が丘を上っていくというものを今か
ら手話でやりますけれども、車の場合は……

(手話の動作)

今のはアメリカ手話です。次に日本手話でやり
ます。

(手話の動作)

このように類別詞が違うものを使ってますけれ
ども、原則は同じであるということです。

でも、リスが丘を上っている場合は、

(手話の動作)

今の手話が、アメリカ手話での小動物をあらわ
しています。

それから、もう一つ、手話の文法としては、数
字の統合というものがあります。

今からでは、「会う」というのを手話でやってみ
たいと思いますけれども、2人が3人と会ってい
るということです。

それから、もう一つは、統語論的な目的でプロソディーを使うという特徴です。

これは、そのプロソディーを使って統語論的な意味を持たせるということに関しましては、いつもやってるわけです。

(手話の動作、顔の表情2種)

語順は変わらないんですけども、プロソディーを使うことによって疑問形になってるということですね。

次に、中国手話でやる文法になりますけれども、これは、決められた形態素と呼ばれるものを使って否定または肯定をあらわしているものです。

(手話の動作)

いいですね。バッド、きれい——クリーン、汚い、スキルがある、スキルがない。グッドラック、バッドラック。

次に、日本手話語属の性別のマークということがあります。

今からビデオをお見せします。その手話というのは、あなたの彼女に言いましたかという内容のものなんです。

見てください。

(手話のビデオ)

最初に言って、女性に対して言った、疑問形であるというのは、眉にあらわれています。

you、あなたはと言うのは、視線によってあらわしてるわけです。

過去、過去形をあらわすのは、「ポ」という口の形です。

それから、目的語の性別をあらわす手話です。

でも、これは主語の性別もマークしています。

「彼女があなたに話します。」

日本手話ではよくあることですが、音声言語の日本語の場合は、数もなければ、それから、性別のマークもないということです。

それから、手話の話者というのは、何か人工的なものであって、何がそうではないのかということもはっきりとわかっています。それが、ゴリラ

ですとかチンパンジーとは違うところでして、人間の場合でありますと、ちゃんと何が文法であるのか、何が文法ではないのかがわかる。

これは、データを抽出しているときですとか、何度もその繰り返しやっていく中で、文法的でないものを文法的なものに修正してもらおうというところであらわれてきます。

そういうことで、手話には文法はないということが否定されたということになります。

音声言語と手話言語によって文法が違うという話を少ししましたけれども、もう少し例をお見せしたいと思います。ここでは、英語とアメリカ手話の違いについてお話をしたいと思います。

御存じのとおり、英語の場合、動詞の一致というのは、主語に対して行われます。He doesとかThey doということなんです。

ですけれども、一方でその手話の場合は、目的語に対して動詞が一致するということになります。一旦目的語に対する動詞の一致が発生いたしますと、主語に対しても動詞の一致が起こることもあります。

それから、アメリカ手話の場合は、先ほど言いました類別詞というものがありまして、また、一方で英語の場合は、数量句というものがあります。カップを棚に置く。そして、本を棚に置くというのを今からしたいと思います。

(手話の動作)

一方で音声言語の英語の場合ですと、このような違いというのが数量句というのであらわれてまいりまして、two cups of coffeeとか、three years goneという形であられるわけです。

それから、英語、音声言語の英語の場合は、それほど文の構造をあらわすのに、プロソディーを使いませんが、手話の場合は、例えば、質問形の場合は、眉を上げるとかという形でプロソディーを使うわけです。

それから、もう一つの違いは、アメリカ手話の場合は、時制はありませんけれども、動詞のアス

ペクトがある。一方で、音声言語の英語の場合は、その逆だということです。

次に、日本語と日本手話の比較、違いに関してです。

このような違いというのは、日本語と日本手話だけの間ではなくて、中国語と台湾手話だとか、中国語と中国手話、または、韓国語と韓国手話の間にも見られます。

1つ目ですけれども、日本語の場合は、動詞の必要はありませんけれども、日本手話の場合は、主語、目的語に対する動詞の必要があります。

それから、日本語の場合は、限定詞というのが名詞の前に来ますけれども、日本手話の場合は名詞の後に来る。

それから、whの質問をする場合ですけれども、日本語の場合はwhの質問をした場合でも、その言葉というのは特に動かなくもいいですし、または、移動してもあちこちに移動することもあるわけですけれども、日本手話の場合はwhの単語というのは、文の最後に来ようになっています。

先ほどから説明したとおりですけれども、中国語、そして、日本語においては、音声言語ですけれども、そのうちの類別詞というのを使っていますけれども、一方で、中国手話、日本手話の場合は、その述部に類別詞がある。

そして、中国語と中国手話、台湾手話、または韓国語と韓国手話の間では、語順も違います。ということで、これも誤解であるということです。

次に、手話というのは、未発達のものであって、初歩的なものであって、抽象的なものをあわせないという神話です。

もちろんそのアメリカ手話と日本手話、それぞれが音声言語の文法に近い部分も持っている。ですけれども、一方でそのかなりその文法はそれぞれ違うということです。

ひとつここで興味深いのは、日本手話の場合は右側主要部ということで、主要部が一番文の最後に来ると。SOVという形をとります。

ですけれども、台湾の場合は、もう日本の統治時代が終わりまして60年以上がたっておりますので、文法が変わってきて、今では台湾手話においては、主要部が前のほうに来るといふふうになっています。

もちろんその音声言語が手話に行き渡るということもありまして、この一番下に書いているところが、中国手話ですけれども、A not Aというようなのを、イエス・ノーの質問のときにそのような文章を組み立てます。

そういった意味で、例えばASLを使って——アメリカ手話を使って、今ここでお話をしているような内容を話すこともできるということです。したがって、手話を使って大変抽象的な概念とかも話せるわけです。もちろんそれをパントマイムでやろうとすると、不可能ではないかもしれませんが、大変難しいというのは理解できると思います。

ということで、しっかり確立された手話のユーザー、話者というのは、例えば、借用語を使ったりですとか、造語を使ったりですとか、その言葉をあらわすことには全く問題がないということです。ちょうど説明がありますけれども、「スマホ」という最近の日本語手話を学んだばかりです。

(手話の動作)

それから、手話においても再帰、Recursionということが可能であるということです。限定的なものを何回でも繰り返し、繰り返して複文ができるということです。例えば、私が九州で研究をしていたときに、その研究に協力してくれたコンサルタントの人が、アメリカに帰らないほうがいいのというような言葉をおっしゃっていました。

(手話の動作)

これは、3つの節から成っている文章ということになります。

それから、手話のユーザー、手話の話者というのは、何が文法的であって、何が文法的ではないということもわかっていらっしゃる。私自身は、

アメリカ手話に関しては、もう10年以上にわたって学習しているわけですが、いまだにこの聴者としてのアクセントは聞けないということなんです。したがって、音声言語を学ぶのと同じように、手話を学ぶのも大変難しいということなんです。

では、抽象性と図像性という話をしたいと思います。多くのサインというのは、もともとその音があるということです。一つが、手話をやりますが、恐らくそれが何を意味するのかというのは、皆さん、すぐにおわかりになると思います。今の手話は、わかりますでしょうか、ビデオで、何だと思えますか。

(手話のビデオ)

(聴衆から「ベースボール」という声があがる)
今のは、アメリカ手話のベースボールなんですけれども、最初日本に来たときに、日本手話ではベースボールの手話が違うということに驚きました。例えば、これは漢字とも似ているんですけども、手話ももともと大変図像的で、一見すればすぐに何かわかる、意味がわかるというものだったんですけども、それが徐々に図像的ではなくなっていくということがあります。漢字の場合もそうです。これが「日」に見えますか。もともとはこういう漢字の起源。

(黒板に二重丸を描く)

これが、今のような「日」という漢字になっていったような、同じようなことが手話でも起こるということです。では次に、日本手話の「野球」です。「野球」だと言ってから見れば、わかるかもしれませんが。

(手話の動作)

ここでは一つ概念といたしまして、「透明」であるということ、「不透明」であるということ。アメリカ手話の場合は、一見すればすぐにそれがベースボールということで、透明性があるということです。日本手話の場合は、それほど透明性がない、一見ぱっと見ただけではそれが何を意味している

のかはわかりにくいと思います。でも、一旦説明すれば、ああ、なるほどということになりますので、半透明といいますか、完全な透明ではないと。透明に対して半透明ということなんです。

それから、手話の場合、このように何らかのもともとの音になっている、そういった図像があったとしても、手話によって、もともとの対象のどの部分を抽象化しているのかは違うということです。見てください、こちらの手話を。

(手話の動作)

何だと思われますか、どなたか。

(「パトカー」という声あり)

一旦聞けば、確かに木が、葉っぱが揺れているんだというのがわかると思います。日本手話です。日本手話の場合は、木の幹のところをあらわしているということで、木全体をあらわしているわけではありません。

次に、このようなもともとの図像、何らかのその図像があってできている手話の場合でも、抽象的な意味を持つこともできます。「びっくり」というのは抽象的な概念なんですけれども、この手話においては図像的であるということです。先ほどもやっていたように、もし何らかのコンセプトに対する手話が存在しない場合も、手話をつくることもできますし、またはその音声言語から指文字でもって借用してきたりすることもできます。でも、手話によっては指文字がない手話もあります。その場合にどうなるのか。ここで重要なことといたしまして、もちろん手話というのは図像的なものもあります。だから、何だど。ということで、全ての手話が図像的であるということではないということは繰り返し言ったとおりです。それから、多くのもう合理化したような手話というのは、もともとの図像が何であったのかわからないというようにもなっていると。もともと起源が図像であった手話であっても、それでもって抽象的な考えというものをあらわすことができる、具体的なものに必ずしもひつつく必要はないと、

縛られる必要はないということです。

手話を考えますと、我々がこれまで音声言語等に考えてきたことに関して再考させられるいいチャンスになります。それから、これまで無視されてきたような問題にも直面せざるを得ないような状況にもあるわけです。それからまた、音声言語もどれだけ図像性を持っているのかというのも、いろんなタイプの言語があるわけです。日本語の場合は、このような擬音語みたいなのがたくさんあるということで、図像的であるということです。それから、バントゥー語というのもの、表意音というのをたくさん持っておりまして、クリックの音と関係したような表現を持っています。

それからもう一つ、図像性というのは、必ずしも子供たちが手話を学ぶわけではないと、そういう証拠というのはありません。したがって、ソシユールはそういう点では間違っていたかもしれないと、音声言語も、もしもつと図像的なものになり得るのであれば、図像的なものになっていたかもしれないということです。でも、音声ですから、限度があるということです。

それから聾者の方は、聾者以外の方々と話をするにもなれていますので、自分たちの言語体系から離れたところでコミュニケーションをする能力にもたけています。

では、最後の写真ということで、手話というのはどこで使われるのかということです。

手話は、実際は違います。国ごとによって違う。アメリカ手話の話者と、そして日本手話の話者の間では会話はし合えないということです。それから、手話の中にも方言があります。例えば、中国手話の場合は、北部と南部でそれぞれ方言がありますし、日本の場合も東部と西部、アメリカも東部と西部で手話の中にも方言があります。それから、手話の地理というのは、音声の地理とは違うということです。例えば、アメリカ手話で、最も近い手話というと、フランス手話になります。アメリカ手話とイギリス手話の間では、お互いには

理解し合えないということです。例えば、同じように、台湾手話と中国手話もお互いでは理解し合えません。周囲の音声言語では北京語が話されるにもかかわらず、手話の話者の間ではお互いに理解し合えないということです。ですけれども、日本手話話者は、台湾手話、韓国手話話者と比較的理解がし合えるということです。お互いに関係している言語であるということからです。ということで、こういった神話、誤解というのは全て否定されたということになります。

これがどうして重要なのかということで、今、否定したような神話、誤解というのをもとに、大変重要な教育上の決定がなされているということがございます。例えば、発話、話すということが言語であるというような考え方。したがって、聾の子供たちは、話す、言葉を覚えなさいといけません。ですけれど、もちろん聾児、聾者というのは聞くことができません。

ここで、少しデモンストレーションしたいと思います。皆さんは、日本語を御存じです。今から発話せずに日本語の文を話してみたいと思います。答えられます。わかりましたか。日本語がわかっているのに、口の動きを見てるだけでは理解できないのに、もともと聞こえない人が口の動きだけを見て日本語をまねるということがどれだけ難しいか。ですけれども、教育者、特に文科省が言っているのは、子供たちにもし、手話をさせると、話すということを覚えなさいので、考えることも覚えなさい、そうなると言語が持てない子供になってしまうというふうに言っています。でも実際は、手話というのは言語であるということなんです。それから、彼らが言う、教育者たちが言うのは、手話というのは簡単だから小学校でわざわざ覚えなくても、必要であれば、またもう少し年をとってから覚えらるだろうというもの。したがって、日本の方針としては、一部県によっては例外がありますけれども、小学校では手話は使わない、中学校、高校になれば手話を使ってもいいだけ

ども、小学校では使わせないという方針です。したがって、多くの子供たちが言語の臨界期を過ぎてから手話を覚えるということになります。したがって、文科省のばかな人たちが——言っているのかな、理解していないのは手話というのは本当の言語だということを彼らは理解していないと、したがって、聾児、聾の子供たちが早い段階から手話を学ぶことができない、そういった機会を奪われているという意味では、人権自体が奪われているということになります。

一方、西洋ではどうか、アメリカ、ヨーロッパの状況ですけれども、アメリカでは高校だとか大学によって、アメリカ手話を教えている、学科として、外国語として教えています。次に、ヨーロッパにおいては、手話というのは少数言語、そして遺産言語として認められています。そして、音声言語と手話言語の両方を使っているようなバイリンガルの、バイカルチュラルなプログラムというのが広がっています。アメリカの場合は、聾であるということが、聾という診断がついたその直後から、自然な手話というのが利用されます。アジアの場合も、教育の中で一部手話を利用されることがありますけれども、ほとんどは対应手話であって自然手話ではないと、そして、ほとんどの場合が言語の臨界期を過ぎてから手話を教わるということになります。

どうして、私自身もそうですけれども、このような手話言語の研究をしているのか。私は、言語学者といたしまして、その普遍性というものに大変興味を持っています。その中で、一つ理解したいのは、手話言語を研究する中で、どの普遍性というのが全ての言語に対して普遍性を持っているのか、どの普遍性というのが音声言語においてのみ適用されるのかということに興味を持っています。それからまた、手話の研究は言語学の研究にも貢献できると、そして、音声言語では見つからないようなエビデンス、証拠というのが手話で見つかることがあります。もちろん言語学者が、手

話言語の研究者に対してどういったところを見なさいというようなアドバイスをすることができずし、またその言語理論もそれを助けてくれるわけです。

ですけれども、時々あることですが、こういった言語の理論家たちは、自分の音声言語ベースの理論を手話にも無理やり当てはめようとしてますから、それがうまく行かないこともあります。したがって、手話言語の研究者が、言語学者の理論家たちの自分たちの仮説を見直すという機会を与えることもあります。もちろん、その理論家たちがそれを、それに対して抵抗することもありますけれども。その幾つかの例です。このオートセグメンタルフォノロジー、自立分節音韻論というのを知っている方は何人ぐらいいらっしゃいますでしょうか。先生だけでしょうか。これは、スーパーセグメンタル、超分節、分節を超越するというような論が、分節の理論に對しまして劣っているというような理論あったんですけれども、それに対して、より自立したものであるというような新たな理論が出ております。例えば、トーン、音調というのは、言葉から、単語から離れて別のところにひつつく場合があります。ですけれども、それをあらわすためには、音節的にそのトーンはひつついている必要があります。でも、手話の場合は、それは必ずしも必要ではないということなんです。

ASLのアメリカ手話の2つの手話をお見せしたいと思います。表情が、音声言語でいうところの音調と同じだというふうに仮定してください。見てください。

(手話の動作)

今の2つの手話は同じなんです。このように、マニュアルの、すなわち手とか指を使った部分を脱落させて使わなくて、表情だけで同じ意味をあらわせる、すなわちそのセグメントが独立してるといことです。したがって、音声言語よりも手話の言語学において、この自立分節音韻論というの

が、より強く支持される得るわけです。

それから、表語論ですけれども、アメリカ手話の場合、動詞のサンドイッチというのがあります。その場合は、動詞なんですけれども、もともとの場所に1回出てきて、その後また別の場所にコピーされます。それが、移動のコピー理論を支持することにも役立つわけです。

それから、表情というのを使うことによりまして、質問だとか否定形というもので、このオペレータースコープというものが明確にあらわれてくるということもあります。「あなたは何を食べましたか」という文を、今からアメリカ手話でやります。アメリカ手話の場合は、whatが一番最後に来ます。ですけれども、手話でやった場合は、表情のところはそのwhat、「何」というのが、その文の間ずっと続いています。よろしいでしょうか。

(手話の動作)

眉のところ、眉がずっと変わらずに疑問をあらわしているということで、そのオペレーター、機能法というんでしょうか、それがずっとその文の間、文の幅、全てにわたって続いているということです。

それからまた、手話の研究をする中で、新たな手話が生まれているというのわかります。タイムマシーンがないのでは、古い日本語を見ることはできません。ですけれども、ニカラグア手話に関しては、1975年から使われていますので、完全に歴史をたどることができるわけです。

実際に、手話によって言語学者が自分たちの理論を見直すことになった例ということですから、一つはアメリカ手話でのnull argumentと言うんでしょうか。イタリア語、スペイン語を御存じの方、いらっしゃいますか。イタリア語だとかスペイン語になりますと、動詞の一致が大変強いということなので、必ずしも主語を明示する必要がないということなんです。これが一つのnull argumentの例でありますけれども、それからもう

一つの例としては、日本語、中国語に見られますけれども、一番最初にトピックを、主題を決めてしまえば、それを後から繰り返し言う必要はないというものです。わかったことといたしまして、アメリカ手話は今申し上げた2つのnull argumentというのが見られるということです。音声言語の場合は、今申し上げました2つの例のどちらか一つを持っているか、両方とも持っていないかということなんですけれども、英語には今申し上げましたようなnull argumentっていうものはありません。日本は、先ほど説明した一つのタイプのもを持っていると。イタリア語、スペイン語も一つは持っている。でも、アメリカ手話はその両方を持っているということです。

それから、これまでの言語論的な考えに対して、一つのチャレンジする、対抗するものとして、アメリカ手話の場合であると、複数の文章から成る、談話でしか利用されないような手話もあるということがわかっています。ですから、それは音声言語にもあるんですけれども、これまでにはそれを考えてこなかったということです。

それからもう一つが、これまでの当然のこととして考えられたことに関してもう一度考えなければならぬような状況にさせるのは、どれだけの言語の変種が許されるのかということです。例えば、手話の場合は、小学校では教えられないということです。遅い段階で手話に接すると、手話を学ぶということになりますので、標準化がそれほどされてないということになります。たくさんの変種ができるわけですから、ある一つの言語といったときに、どれだけその変種が許されるのかというようなことが、ここでも手話を研究することによって、また一つの疑問になっているわけです。

私は、アジアとそれから西洋の手話、両方を研究していますが、これは音声言語、手話言語両方の研究にとって重要だと思うからです。私たちが知りたいのは、全ての手話において普遍的なもの

とは何なのかということ、逆にどれだけ手話というのは違うものになり得るのかということ、それから、手話としてどのような文法のメカニズムを利用できるのかということ、それから、通常手話というのは、バイリンガルの環境の中で利用されますので、話し言葉だとか、書き言葉が手話の構造にどのような影響を与えるかということです。

次に、西洋と東洋の手話の違いに関してですが、両方の手話が文化的な価値観というものを、違う形でコード化しています。一つは、アジアの手話の場合、特徴となりますのは、これは西洋の手話にはないんですけれども、兄弟の話をするとき、その兄弟が年上か年下かということがアジアでは重要です。それからまた一方で、聾のカルチャー、文化というのが、地元の文化にまざるということもあるということです。一つの例としては、聾者というのは、公共の場でお互いにタッチをする。それは、日本、中国、台湾、アメリカ、どこでもそうです。聴者、耳が聞こえる人たちは、公共の場で最近はお互いにタッチすることがありますけれども、昔はほとんどなかったわけです。聾者の場合は、やはり相手を触らないと、自分のほうに注意が向けてもらえないので、そういった必要性もあるわけです。したがって、聾者の方は、特に日本人と比較した場合に、よりタッチというものがよく見られるということです。

それから、聴者が使っているようなジェスチャーが、手話の中に取り込まれて、それが文法になっていることもあります。例えば、この手の形ですけれども、これは日本手話においてはお金の類別詞になります。これは、もともと聴者のカルチャーから来たものです。私があなたに払う、あなたが私に払うというのを手話でやりますと、このように文法的にアクティブであるということがわかると思います。

あと何枚かのスライドで、言語学的には大変興味深いところなんですけれども、皆さん、疲れていらっしやると思いますので、飛ばしたいと思

ます。

中国、詳しくは説明はしませんけれども、中国とか香港の手話において、表情で先ほど説明したようなオペレーターのスコープを示すということも行われません。アメリカ手話では、それは必ず行われています。

これ、日本手話のおもしろい側面でも御説明したいと思いますけれども、まず、アメリカ手話において「wh」は、「wh」の表情です。この表情というのは、セグメント、分節に必ずひつつく必要があります。このビデオですけれども、「どの色が好きですか」という部分です。これ、今は日本手話ですけれども、アメリカ手話でも似たような手話です。次のビデオはアメリカ手話ですけれども、完全に非文法的なものであると。これはwh、一番最後に来ています。これは、アメリカ手話では不可能であると、あり得ない。

(手話のビデオ)

それから、こちらの例ですけれども、日本手話の性別のマークですが、小指を立てるというのは音声言語から借用してきたものですけれども、それが手話の中でも文法化されているわけです。先ほど見た文ですけれども、「あなたは彼女に言いましたか」という文です。「あなたは彼に話しましたか」というのは、親指か男性のマークになっている形です。

この語族の中において、書き言葉からどのように借用、言葉を借用しているのかを少し話したいと思います。

西洋の手話というのは、指文字というのは持っています。その中でも、特にアメリカ手話で指文字の利用が多いということです。アジアの手話の中でも、中国手話、日本手話において指文字はありますけれども、比較的新しい現象です。例えば、数年前、九州に住んでいて、九州の田舎のほうの研究をしたことがあるんですけれども、お年寄りの方々は指文字というのは御存じではなかった、つまり指文字というのは比較的最近発生したので

あるということです。では、アジア手話では、指文字を使わないかわりに何をしているのか、漢字を使っています。指文字と同じような形で、漢字の一部が指文字のかわりに利用されているというのがアジアの手話になります。

ASL、アメリカ手話にもあって、指文字で大変短くあらわしたものが、サインになっている、手話になっているという例があります。例えば、「no」、それを指文字であらそうとすると、「no」。

アジアの手話も同様に、文字のサイン、手話というのがあります。聴者の方もそうですし、聾者の方も、手のひらに文字を書くことがあります。でも、それが手話のサインになった場合は、文法的にアクティブになるわけです。それは、その痕跡を残したもまたはその描写されたものということになりますけれども、いずれにしても、文法的としてアクティブであるということです。

ここで一つの例ですけれども、描写された手話、サインです。これは、ネームサイン、名前の手話です。通常これは「田んぼ」をあらわすときには利用されないんですけれども、人の名前、田中さんとかをあらわすときにはこのような手話が使われます。

(指文字の例示)

昔、この漢字でよく混乱したんですけれども。「人」と、それから「入る」です。中国の手話で「人」というのは描写された手話になります。日本手話のほうは、「人」というのはコンセプト、手話というのになります。中国手話の「人」は、こういった手話です。「誰」のサイン。「何人」というサイン手話。「何歳」というときの、このように指を動かして、文法としてアクティブになると—日本手話。これも一致が見られます。どうしてそのような違いがあるのか、もちろんその歴史が違うということだとか、文化的または言語的な形成という、形成文法、それからタブーによって違

いが生まれるということもあります。それから、周辺の音声言語も違う。それからまた、学校で許されてない場合でも、実際、隠れたところで利用されている、それによって違いが出てくるということもあります。どこでとは言えないけれども、とにかく違うということが起こり得るということです。

一方で、手話と音声言語がどうして似通っているのかということですが、人の言葉であるということです。もちろん、先ほど言いましたように、聾者のものがあるということです。それから、手話同士でも、国が違っても似通ったところがあるというのは、やはり使っているチャンネルが同じであるという制約があるということです。それから、学習方法が似ているということもあります。というのは、ほとんどの聾児というのは、手話に関しては自分たちの友達とかから学びます。90%は友達から学ぶということなんですけれども、聾児の親、親も聾者というのは10%しかいません。それから、音声言語でも、例えばクレオール化のときに同じようなことが起こります。

これが一番最後のスライドということで、皆さん、安心されたと思いますけれども、きょう、覚えておいて、覚えて帰っていただきたいことといたしまして、手話というのも大変複雑であるということと、その体系をしっかりと理解することが重要です。また、言語学者も手話研究によって多くのことを学べるということです。聾者の方たちというのは、自分たちのことをハンディキャップがあるとは見ていません。ある友人が言ったんですけれども、何が重要かという、その聾者間の間にあることが重要であって、耳が重要なのではないというふうにおっしゃってました。このように、多くの障害があるにもかかわらず、手話がしっかりと存在するということは、人の言語に対する頑強性というのを、堅牢性というのをあらわしていると思います。

(文責：和田 学)